日本経済新論

大変革が始まる

日本経済新聞社編

日本経済新聞社

112
D202
719

日本経済新論

大変革が始まる

日本経済新聞社編

現代国际关系研究所
238755
图书馆藏书章

日本経済新聞社

RB
1993, 5, 10

日本経済 新論

——大変革が始まる——

1992年7月24日　1版1刷
1992年9月21日　　7刷

編　者　日本経済新聞社
© Nihon Keizai Shimbun Inc. 1992
発行者　田　村　祥　蔵

発行所　日本経済新聞社
東京都千代田区大手町1-9-5　〒100-66
電話 (03) 3270-0251　振替 東京 3-555

印刷　東光整版・製本　積信堂
ISBN 4-532-14128-1

本書の無断複写複製(コピー)は，特定の場合を除き，著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

まえがき

九〇年代の日本経済は、三つの転換期にぶつかっている。第一に、バブル崩壊後の調整過程をどう乗り切るか。第二に、戦後ずっと続けてきた会社本位の経済社会システムを生活重視にどう切り替えるか。そして第三に、冷戦後の世界の歴史的な転換期に経済パワーとしてどんな役割を担うかである。いずれもこれまで日本経済が経験したことのない自己変革が求められる。それは、様々な意味でのコストを支払う転換であるといってもいい。しかも、そうした変革を同時にやってのけなければならない。

ニクソン・ショック、二度の石油ショック、それにプラザ合意後の円高ショックと、日本経済は危機に直面するたびに、その危機をバネに困難を乗り越え、実力を伸ばしてきた。戦後の復興、高度成長の後も日本経済の奇跡は何度も繰り返された。

それはいずれも外的要因の大きな変化に対して、日本人が結束してことにあたる場面だった。つまり、だれの目にも明らかな外傷に対して、外科手術を施すようなものだった。手術は成功し、リハビリもうまくいった。日本経済が日に日によくなっていくのを、日本人のだれもが実感できた。

ところが、いまの三つの転換は、これまでの危機とは違う。例えば、バブルの崩壊は、目にみえる

外傷ではなく、内臓疾患ともいえる。赤ら顔で一見、元気そうにみえるから、だれもが本気では心配しない。飲み過ぎのせいだよと、いわれたりする。飲み過ぎだった面はあるが、内臓疾患が進んでいるのもたしかである。完治までには時間がかかる。

問題は、日本経済がこの内臓疾患にどう対処すべきか、はっきりした処方箋を持っていないことだ。外圧には対応のしようがあるが、内部要因の大きな変化に対応したことはなかった。

生活重視への転換は、日本経済の体質改善のようなものである。夜型だった人間を早寝早起きに変える。朝の散歩も欠かさない。生活習慣を変えるのは、そう簡単ではない。それなりの意志が必要だ。冷戦後の転換に、対応するのはもっと難しい。ソ連が解体されてみて、世界中がいまアイデンティティー・クライシス（自己喪失）の状態にある。経済の時代に経済パワーとしての日本の国際的役割が大きくなったのはだれでもわかるが、どう地球貢献すべきなのかわからない。国際社会での振る舞い方にも慣れていない。気迷いがこうじて自信を失い、ややノイローゼ気味である。

では、どうしたらいいだろう。ここに、日本経済の二つの見取り図が用意されている。

ひとつは、自己改革を通じて転換期を乗り切る道だ。時間はかかるが、日本経済はバランスの取れた新しい成長軌道に向かうだろう。日本経済の潜在成長力は依然として大きい。新しい日本経済では地球環境を守るという条件と両立させながら、その潜在成長力を発揮できる。しかし、単に強いだけではない。暮らしやすく開かれた経済でなければならない。それは冷戦後の世界のなかで規範になる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わかりやすい経済システムであるといってもいい。

もうひとつの見取り図はこうだ。いまの転換期に対して、これまでと同じように、ただやみくもに立ち向かう。あるいは、嵐が去るのを身を縮めて待つ。自己改革への努力はしない。それでも、日本経済はかなりの間、強さを維持できるだろう。しかし、これまでの延長線上にしかない強いだけの日本経済は、転換期の世界で、国際摩擦の種になるだけだ。強いけれど暮らしにくい。何のための経済なのかわからない仕組みといっていい。それは、日本経済が重い「日本病」に苦しみ続ける姿である。

どちらの見取り図を選ぶか。日本経済はいまその分岐点にある。そして、それは「外圧」でやむをえず選ぶのではない。日本人自身の選択である。

本書はそうした転換期にある日本経済を診断し、これからの見取り図を浮き彫りにすることをめざした。日本経済の行方をじっくり考えてみたいという読者、企業社会の潮流変化を探ろうとしているビジネスマン、これから社会に、世界に飛び出そうとしている若い人たちの参考になればと、幅広い情報を盛り込んでまとめた。

第一章では、バブル崩壊後の日本経済を解説し、経済システムの変革を通じて日本経済をどう再生させるか判断の材料を示した。

第二章では、プラザ合意後の日本経済の強さを象徴してきたマネー経済の動揺を分析し、九〇年代

のおカネの流れの変化を描いた。

第三章では、日本の産業の国際競争力に踏み込んだ。「産業の世紀」をどう維持するか、日本経済のたくましさの源泉に迫った。

第四章では、社会や国際社会との共生を求められた、日本的経営がどう転換を余儀なくされているかを紹介した。

第五章では、世界の成長センターとなったアジアと日本とのかかわり方を通じて、日本経済の活路を示した。

第六章では、冷戦後の混とんとした世界経済のなかで日本はどう振る舞い、どんな役割を担うか日本経済の選択について考えた。

経済、金融、産業、国際問題をそれぞれ専門に担当する日本経済新聞社の記者四人がチームを組み、討論のうえ共同執筆した。第一章、六章を岡部直明（論説委員兼経済部編集委員）、二章を阿部重夫（金融部編集委員兼論説委員）、三章、四章を西岡幸一（産業部編集委員兼論説委員）、五章を小池洋次（国際一部次長兼論説委員）が分担した。

一九九二年七月

日本経済新聞社

日本経済 新論／目 次

第1章　バブル崩壊後の日本経済

1　ポスト・バブルへの挑戦 —— 17

「政策不況」プラス「心理不況」 17
政策、市場の失敗が重なる 21
遅れた構造調整 25
多様な価値求める社会に 29

2　何のための成長か —— 31

真のゆたかさへの挑戦 31
忙しさを競わない社会に 35
環境保護に大胆な資金協力を 37

3　歴史の転換のなかで—透明な資本主義へ —— 41

システム・フリクションを超えて 41
求められる行政システムの改革 44
開かれた企業システムに 49
グローバル時代のルール提案を 51

第2章　揺らぐマネー大国——九〇年代の資金フローと日本

1　噴き出した矛盾 —— 57
バビロンの幻影 57
蕩尽のクライマックス 59
日本経済のメルトダウン 62
ヴェブレンの洞察 64

2　国際収支に何が起きたか —— 68
グリーンスパンの日本経済論 68
ユーロ市場の異変 73
邦銀も三Lの罪と罰 77
ジャパンレートの屈辱 82
逆流した資金の行方 83
ジャパンマネーの裏口 84
ドイツも他人の懐頼み 88

3　国内資金フローの逼迫 —— 90
持ち合いのリンケージ 90

急流下りの船列 95
マネーサプライの異常値 101
4 負債デフレからの離脱 109
貯蓄・投資バランスの激変 109
両建て〝錬金術〟の縮小 112
緊急避難の処方箋 115
自然治癒とのミックス 118
第3章 産業の世紀
1 最強の競争力 123
異例の「物乞い訪日」 123
バブル経済崩壊後も自信揺るがず 129
逆境をバネにする日本企業 135
2 激化する摩擦 141
米国は「結果の平等」要求 141
知的所有権に広がる 143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

直接投資の摩擦も激化 145

3 グローバル化の定着 150

進むグローバル化 150
五つの理由 153
地域ごとに統括 158
R&Dも国際化 159

第4章 模索する新日本的経営

1 本業回帰―バブル経営との決別 165

再リストラへ 165
現地生産の撤収続出 169
海外M&Aの誤算 171
大型再編劇も表面化 173

2 止まらぬR&D 175

転ばぬ先の杖 175
「一〇%クラブ」 176

技術収支も黒字に 179
R&Dが企業の命 182

3 日本企業の憂うつ 185

強さが弱さへ 185
商品サイクルも延ばす 187
強まる系列批判 190
変わる取引関係 193

4 世界企業の哲学 196

「盛田論文」の衝撃 196
尊重し合う「共生」へ 199

5 新しい企業像 202

新しい評価基準を 202
求められる「質」の条件達成 204
進む経営理念の再構築 206
「振る舞い」が大事に 208

第5章　ニューフロンティア——アジア太平洋経済

1　アジアの経済ダイナミズム　217
日本企業の進出ラッシュ続く　217
〝超〟高成長　220
自立的発展　223
アジアにこそ活路　225

2　日本とアジアの将来　228
輸出主導型で発展　228
エンジン役の日本　234

3　脱冷戦期のアジア太平洋経済　236
勃興する経済圏　236
新たなビジネスチャンス　239
環日本海経済圏　242
中国が輸出基地に　244
資金、技術など支援を　246

4 アジア太平洋の地域協力 249
構想から現実へ 249
「開かれた地域協力」 252
米国の反発 254
日本の市場開放がカギ 257

第6章 新しい世界経済秩序と日本

1 揺らぐ自由貿易 263
地域主義の連鎖広がる 263
ガットの守護神に 267
痛みを覚悟するとき 270
2 日米の新しい関係 272
変わるパーセプション 272
「脅威」と「おごり」の悪循環断て 274
進む米国のリストラ 277
3 変質する三極経済システム 279

もたつく日独 279
協調体制の建て直しを 282
4 日本経済の座標軸 286
問われる国際責任感覚 286
効率性を超えた物差しを 289
経済超大国より経済先進国に 291

装幀・安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com